INFORMATION エセナおおた 第25号

平成20年6月15日

発行: 大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」

男女共同参画社会の実現をめざして開催

エセナフォーラム2008 7/5(土)、7/6(日)

大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」は、毎年7月に男性・女性の差別なく、それぞれの個性、能力を十分に発揮することのできる男女共同参画社会の実現をめざしたエセナフォーラムを開催しています。

今年は、ワーキングマザーのための無料会員制インターネットサイト"ムギ畑"の創設者であり、経済評論家(兼公認会計士)として活躍中の勝間和代さんをお迎えして、「時間効率UP・モチベーションUPの極意」と題した講演と区民のみなさんによる「展示・ワークショップ」を行ないます。

勝間和代さん講演会

7/5(土)
14:00～16:00
多目的ホール

事前申込受付中

☆展示・ワークショップ☆

展示 7/5(土)・7/6(日)両日

女性の夢とぷち起業 / 大震災～女性の視点で検証 / ストップ！女性に対する暴力 / ワーク・ライフ・バランス

ワークショップ

日時		タイトル	実施団体	会場
7/5(土)	10:00～12:00	防災セミナー第2弾 大震災～女性の視点で、ズバリ地域の避難所を検証！ ～いつか来る その時のために～	エセナフォーラム主催事業	第2・3学習室
	10:30～12:00	似合う色でイメージアップ！コーディネート入門 ～ベストカラー1Day レッスン～	カラーハーモニー・サポート	第1学習室
7/6(日)	10:00～12:00	ビジネスであなたの生活と社会をチェンジ！ ～社会起業家入門～	NPO 法人おおた市民活動推進機構	1階会議室
	10:00～12:00	体験!中屋映子のカラーセラピー～色で発見!深層心理	ふぇみねっと・おおた	ミーティングコーナー
	10:30～12:00	お金がたまる！家計術 ～ファイナンシャルプランナーが伝授！～	飯村久美	第2・3学習室
	10:30～12:00	子育て応援団@エセナ 「パパ大好き！お父さんといっしょ」	エセナフォーラム主催事業	多目的ホール
	13:30～16;30	子どもが子どもらしく生きられるために ～「ストリートチルドレン」を取り巻く世界～	NGO「ストリートチルドレンを考える会」	和室1・2 及び調理室
	14:00～16:30	ミニ映画上映会「歓びを歌にのせて」 心に響け!天使の歌声	エセナフォーラム主催事業	1階会議室
	14:00～16:00	上映会「ヒマラヤを越える子どもたち」 ～チベット難民の子どもたちを追ったドキュメンタリー	Tribal Spirits	音楽室
	14:00～17:00	子育てをするなら大田区で！ それぞれの目線から見つめてきた子どもと子育て家族の 25 年を語る	OTA 子育て支援ネットふぼれん	多目的ホール
	14:30～16:30	女性の夢とぷち起業～忘れかけていた夢、取り戻しませんか	おおた女性の起業を考える会	第 2・3 学習室

いつか来る その時のために

女たちが語る 報道されなかった本当の 阪神・淡路大震災

いつ、どこで起こっても不思議ではない災害。その時、私たちは何をどうすればいいのかを考えようと、阪神・淡路大震災を経験され、女性の支援を続けている“ウィメンズネット・こうべ”代表の正井礼子さんの講演を3月23日に行ないました。

◆これからという時に起こった大震災◆

みなさんは阪神・淡路大震災で女性が１０００人多く亡くなったことをご存知でしょうか？　どの国でも災害でより多く亡くなっているのは女性なのです。

都市型災害で体験したことを多くの人に伝えたいと、各地で講演をしてきましたが、東京でお話するのは初めてです。これを聞いてくださった方たちが、他の方にぜひ伝えていただきたいと心から思っています。

私は１９９２年から、女性の人権を守り、男女共同参画社会の実現に向けて活動を行なってきました。女性が本音で語り合えるスペース「女たちの家」を開設し、その後、夫からの暴力の相談が次々と寄せられるようになったため、女性が５００円で泊まれる場所を作ったりしてきました。

１９９５年、新年の活動開始を１月２２日にひかえた矢先、１月１７日に阪神・淡路大震災にあいました。震災後の２月には「女性支援ネットワーク」を立ち上げ、女性のための電話相談、物資の配布、女性が語り合う震災女性支援セミナーなどを行なってきました。

◆女性の人権は１行もなかった◆

震災の年の７月に、神戸で「被災地の人権」という大きなシンポジウムがあり、電話帳ほどの厚さの資料が配られましたが、女性の人権は項目にありませんでした。たった１行「女性が性被害にあったという噂が流れたが、兵庫県警は、１件もない、デマであると否定した」だけでした。

私は、某新聞社の人権派と言われている社会部部長にぜひＤＶについて書いてほしいと言いました。「そんなことは何年も前からあること。俺のおふくろも父親に殴られていた。ニュース性がない」と断られました。当事、日本ではＤＶという言葉もなく、妻が夫に殴られることは当たり前だったのです。他の記者たちも「被災地に光を当てる記事を書きたい」と言いました。「被災地に暗いイメージをつけたくない、なかったことにしたほうが本人のため」というのが圧倒的、平均的、普通の意識でした。

そうして震災後、家族愛など美しい話がどんどんマスコミによって流されるなかで、女性がどんな事で苦しみ悩んでいるのかという記録を残そうと手記を募集し、震災の翌年に「女たちが語る阪神・淡路大震災」という本を作りました。また、女性の視点で災害を検証するため２００５年１１月には「災害と女性」というフォーラムを開き、資料集も出しました。

私は震災後の３月頃、避難所を回りました。薄暗い体育館の昼間、いるのは高齢者か乳幼児を抱いた母親たちでした。ささやかな年金だけで暮らしているおばあさん、母子家庭の人にもたくさん出会いました。災害の時には貧しい女性たちが、より多くの被害を受けていると感じました。

◆パート労働者の悲哀◆

震災では阪神間で１０万人ともいわれる人が解雇されました。その多くはパート労働者であり女性でした。阪神・淡路大震災は、戦後５０年の日本社会の現実を一瞬のうちに明らかにしました。非正規の労働者が雇用保険にも加入していない法違反、無権利状態に放置されていたこと、大企業の正社員中心に組織されてきた労働組合、パート労働者の大量解雇に成すすべもなかったのです。

女性パート労働者の無権利状態は震災だからではなく、平時においても同様です。大震災を契機に明らかになったにすぎません。パート労働者は経済の調節弁に使われるということを、あの時まざまざと感じました。

◆自治体の対応にア然◆

震災後、洗濯機を避難所に送ろうと１２０台の洗濯機を集め、避難所に電話しました。喜んでもらえると思ったのに、責任者は「ここは学校やで。洗剤で汚れたらどうするねん。電気代は誰が払うねん」と言いました。２５００～３０００人の人が生活しているのに、暮らしという視点が抜けていたのです。

炊き出しは、心温まる風景だと思われるかもしれませんが、もらう側は何週間も続くと、非常に惨めな思いがします。学校には調理室があるのです。そこを開けてくれたら、温かいお味噌汁やおにぎりを自分たちで作る事ができたのに、教育

委員会は鍵を開けることをしませんでした。今もおそらくそうだろうという話です。

◆わたしの赤ちゃんは大丈夫？！◆

妊婦や乳幼児を抱えた女性たちの問題も深刻でした。ショックから早産になった人たちがたくさんいました。普通は未熟児を産んだら、病院から保健所に通知が行って、保健師の家庭訪問などがあります。しかし、まず高齢者の支援をするようにという通達があり、未熟児を抱えたお母さんたちには手が回らなかったのです。乳児の３ヵ月検診や妊婦検診が始まったのは6ヵ月後でした。

震災から３～４ヵ月経ち、ホッとした時期に、「血まみれの人をいっぱい見た。毎日のようにその夢を見る。お腹の子は大丈夫だろうか」、「外は焼け野原で、歩くと不安に襲われて家から出られず、病院にすら行けない」、「避難所でカップラーメンや冷たいアンパンばかり食べていた。お腹の子の栄養は大丈夫だろうか」という相談もいっぱいありました。

◆問われた夫婦の関係◆

私たちは乳幼児を連れたお母さんたちの集いも行なっていました。１年後、お母さんたちが元気になったころ、新聞に子どもたちの精神状態が悪い、不安定だ、なぜならお母さんたちが不安定だからという記事が載りました。

そこで分かったことは、不安定なのは家の被害の程度などではなく、夫と妻がどれほど不安や寂しさや悲しさを共有しえたかが問題ということでした。夫と分かち合えた母親はわりと安定していました。

震災から２ヵ月経ったとき「女たちで震災体験を語ろう」という集会をしました。明石市の４０代の主婦は、テレビや仏壇が飛び交った後、夫が言った第一声「あさってからの出張どないしよう」に、ショックを受けたと言いました。夫は予定どおり出張に行き、２ヵ月間行ったきりで、見捨てられたと涙がこぼれ、不眠に悩まされたそうです。

こういう話はいっぱいあります。私の住んでいた須磨は、ＪＲに乗ると４０分で大阪に行けます。震災当日は自転車か歩いて１０何時間かけて大阪に行きました。それっきり帰ってこなくなった夫はたくさんいます。会社がホテルやアパートを借り上げ、社員が困らないようにしたのです。

◆震災時はみんな休んで地域のために！◆

フォーラム「災害と女性」のアピール文に、災害特別休暇を男女共に取得できるようにと入れました。震度７の大地震があると、１ヵ月間は激しい余震があります。私の友人の家は1階が潰れ、下に３人の子どもがおりました。友人は足の骨が折れていたのにも気づかずに引っ張り出したそうです。子どもは無事でしたが、おばあちゃんが柱の下になって亡くなられました。消防車を呼んだら「生きていますか？　死んでいますか？」と聞かれ、「死んでます」と言うと、生きている人を助けに行きますからと、彼女のところに来たのは３日後だったそうです。

助かった人の８０～９０％は、潰れた直後に、近所の人が掘り出しています。消防車や自衛隊が来るのを待っていては遅いのです。地域の人たちでどれだけ助け出すかにかかっているのです。そういうなかでも、通勤のマイカーが続いていたのを友人は忘れられないと言っていました。会社を休むということが日本ではできないのだろうと思います。

◆レイプや虐待が頻発◆

警察発表では「ない」とされた女性や子どもへの性暴力ですが、資料集『災害と女性』に、性を語る会の北沢杏子さんが書いています。彼女は当時、避難所になっていた学校の体育館を巡回して、人間関係や性に関することについて被害者たちと話しました。人々が出勤して、ひと気もまばらな日中、幼い子どもに性器を露出または触らせるなどの行為が頻発、男性が眠っている女性に触るのを防ぐために天井の照明は夜通し点灯、幼児の性的虐待、体育館で乳児に添い寝していたところ突然レイプされ、止めに入った巡回中の教員が暴力を振るわれて怪我、など書かれています。

震災の直後に神戸でレディスクリニックを開業していた医師が避難所を回ったそうです。ストレスで月経周期が不順、無月経になったケースは多く、夏はレイプがらみの相談が増えたと言っています。人の住んでいない家や人通りが減った空き室やビルに引きずり込まれてレイプされた、灯りのない暗い街で車に引っ張り込まれたなどです。

神戸の町は、震災から３、４ヵ月真っ暗でした。街灯をつけて街を明るくしてほしいと私たちは警察に行きました。返事は、「街灯は自治会が管理し、電気代も自治会が払っている」でした。ほとんど壊滅状態の自治会に何ができましょう。みんな避難して、集まるどころではないのです。

私が最初に受けた電話相談も、１９歳の女性からのＤＶの相談でした。そういう電話が次々と入ってきました。私たちはＤＶ被害者の支援を続けていますが、シェルターを見学するためにアメリカに行ったときに驚いたのは、「暴力を選ばない男たちの会」が１９８９年のアメリカにすでにあり、地震が暴力の口実になってはいけない、妻を殴る前に電話して欲しいと訴え、緊急事態の中でＤＶを家庭内のつまらないもめ事だと考えないように教育する必要を強調していたことでした。災害後は女性に対する暴力が増加することを予測し、防止活動が災害救援の中に組み込まれなければならないという報告をアメリカとカナダの危機管理機関すべてに送り、高く評価されたそうです。

◆わかってほしい女性の思い◆

女性にとってトイレを我慢する精神的苦痛は、病気やスト

レスを引き起こすほど重要な問題にも関わらず、防災対策の中にトイレ問題を組み込んだ自治体は１９．６％です。

当時、プライバシーがない、手すりもなく階段が辛い、鍵がかからない、男女混合トイレなので男性の視線を感じて恐ろしいなどの声があり、女性全員が男女別のトイレの仕切りがほしいと言いました。また生理用のナプキンを１月１９、２０日に３３万３千枚を被災地に送ったのですが、ナプキン１個を１日用にと手渡され、呆然としたそうです。

女性のニーズが考慮されず、震災から６ヵ月を経てもダンボールで周りを囲っている状態で、着替え室も授乳室もありませんでした。「女性の心と身体」というセミナーを開いた時、昼間はボランティアとして活躍している２６歳の女性が「ここは女性ばかりだから」と話し出しました。

疲れきって夜の８時頃、避難所の小学校に帰ってくる。その頃は教室に３、４家族一緒に共同で暮らしていました。テレビなどでは助け合って仲良く暮らしているような報道だったのですが、その若い女性は、「なんでここに、いつまで知らんおっちゃんがおるんや。着替えもできんやないか、メチャ腹が立つねん」と言って涙をこぼしました。

◆起こってからでは遅すぎる！ 今からできることを◆

震災の時の状況を女性の視点からの検証ということでみなさんにお伝えしましたが、防災は日常的な取り組みから始まると思っています。住んでいる自治体に、どれだけ社会的な支援があるか、福祉は進んでいるか、女性政策はどうなっているか、ＤＶや性暴力の被害者がきちんと相談できる体制があるか、そのようなことが日常になければ、災害時だけ特別な支援が行なわれるのは難しいのです。

防災復興、避難所運営に関する女性の参画についても調査しました。神戸市には震災後、危機管理室という部署ができましたが、職員２０名中女性はゼロです。防災会議への参加も同様です。震災後１０年以上を経ても、防災に関しては近隣都市も似たような状況です。これでは女性の視点を反映させることは困難です。地域で子どもの問題や女性問題、高齢者問題、障がい者問題などへの取り組みを積み重ねてきた女性たちが防災・復興計画の策定に参画することが必要だと思います。

最後に復興時の女性センターの役割ですが、まず早い時期に自分の思いを語れる場であること。兵庫県の男女共同参画センターは、書類が散乱しているなか素早く開設し、相談の件数はものすごかったそうです。さらに女性の視点から暮らしに密着した情報を流すことも重要です。

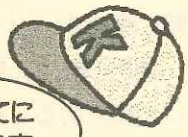
私の話を聞いて「大変だったんだね」で終わるのではなく、“災害は起きる”を前提に、多くの人命や家を失わないように備えてほしい、自治体にもぜひ意見を言ってほしいと思います。

（まとめ　伊藤登美子）

☆☆☆ いつか来る その時のために　防災セミナー第２弾　大震災～女性の視点で、ズバリ地域の避難所を検証！☆☆☆

7月5日 10:00～12:00　エセナおおた第２・３学習室

○夏休み！父子チャレンジ～真夏の3連発～
夏休みはパパといっしょにあそぼ！



3回すべてに参加できる方

◆手打ちそばにチャレンジ
7/27(日)10:00～13:00
◆水でっぽう作りにチャレンジ
8/10(日)10:00～12:00
◆野外バーベキューにチャレンジ(家族での参加OK)
8/24(日)10:00～14:00
定員:15組(申込多数の場合は抽選)　＊保護者が男性であれば誰でも申込みできます。　参加費:各回要材料費
申込:メール(携帯可)・fax　7/15必着

○経済的に困難な状況にある
「女性のためのパソコン実践ナビ」
定員:各コース20名(応募者多数の場合は抽選)　申込締切:7/1
対象:母子家庭、生活保護受給者、母子生活支援施設入所者、住民税非課税世帯または減免世帯の女性、女性シェルター入所者、その他これに準ずる経済的に困難な状況にある女性
申込:申込書に記入してfax、郵送、持参してください。
保育付(無料):6ヵ月以上のお子さんを各コース15名まで

【パソコン講座日程】 両コースとも同じ内容です。
◆Aコース　全18時間
7月14日(月)～19日(土)毎日13:30～16:30
◆Bコース　全18時間
7月21日(月・祝)～26日(土)毎日13:30～16:30

【就労応援フェア】
8月1日(金)12:00～16:00　多目的ホール

エセナおおた映画会

生きとってくれて ありがとう
「夕凪の街 桜の国」
8月2日（土）13:30～15:30
エセナおおた多目的ホール　事前申込制

第八回文化庁メディア芸術祭大賞/第九回手塚治虫文化賞新人賞を受賞した、こうの史代の同名傑作コミックの映画化。

広島原爆投下から13年後と現代に生きる二人の女性の姿を通し、生きることや何気ない日常生活、命の尊さを語りかける。主演は若手実力派女優の田中麗奈と麻生久美子。共演は中越典子、藤村志保、堺正章他。

大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
〒143-0016 東京都大田区大森北 4-16-4
電話 03-3766-6587　03-3766-4586
FAX 03-5764-0604
e-mail　esenaota@yahoo.co.jp
HP URL　http://www.escenaota.jp/
メルマガ escenaotamail@yahoo.co.jp
指定管理者　特定非営利活動法人男女共同参画おおた

「INFORMATION エセナおおた」の発行はNPO法人男女共同参画おおたが区の補助を受けて実施しています。